さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ

すなっぷ

ハンセン病に学び発信する大学生

群馬大学社会情報学部西村ゼミ

5月　群馬大学で「ハンセン病問題シンポジウム」

５月末、前橋市の群馬大学荒牧キャンパスで「ハンセン病問題シンポジウム」が開催されました。群馬大学社会情報学部の学生が中心となってハンセン病問題をひろく一般に理解を深めてもらおうと企画したものです。

会場となった群馬大学 ミューズホール

学生たちは法学が専門の西村淑子教授のゼミに所属し、学習の一環として昨年度一年間をかけて、草津の栗生楽泉園をたずね、入所者に取材し、ハンセン病問題をわかりやすく解説した中高生向けのガイドブックや、２年前に亡くなった詩人谺雄二さんの生き方に焦点をあてた映画を作成しました。

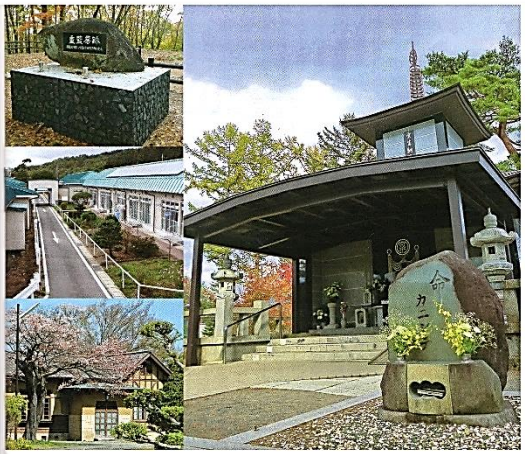
◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆

シンポジウムは、第１部：栗生楽泉園入所者自治会長藤田三四郎さんによる基調講演「らい予防法廃止 20 年、裁判勝利 15 年、偏見差別解消」、第２部：栗生楽泉園スタディーツアーボランティアガイド活動報告、第３部ガイドブック制作班と映画制作班の報告、および映画「いのちの証を求めて　ハンセン病を生きた詩人　谺 雄二」上映、第４部：作家姜信子さんによる講演「いのちと名前」という構成でした。

ガイドブックと映画の内容、講演の様子を紹介しましょう。

学生の視点豊かなガイドブック

大谷颯さんら（現在４年生）の作成になるガイドブック「国立療養所栗生楽泉園」は B6 版で内容は 28 ページ。ハンセン病についての基本的な解説から始まって、国によるハンセン病対策の経過、栗生楽泉園の歴史などがやさしい言葉で書かれています。図表や写真、地図などがふんだんに盛り込まれているので、中高生が手にもって楽泉園を訪れるのには格好の資料になります。各所に見られる若者らしい視点に惹かれます。



国立療養所

栗生楽泉園（くりうらくせんえん）

ガイドブック

納骨堂

なぜ多くの家族が遺骨の引き取りを拒むのか

国の隔離政策により助長されたハンセン病に対する差別・偏見は、患者だけでなく、その家族にも及びました。患者の家族もまた進学や就職、結婚などの様々な場面で差別されました。生活そのものが脅かされることもあったといいます。こうした厳しい現実のなかで、患者の家族は、患者の存在を隠して生きなければなりませんでした。

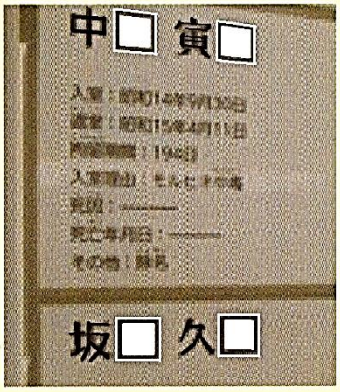
自分の親や兄弟姉妹などがハンセン病の患者であったことを知られるのを恐れ、家族は、療養所で亡くなった入所者の遺骨を引き取ることができなかったのでしょう。

1996（平成 8）年、らい予防法は廃止されました。しかし 2003（平成 15）年に熊本県で元患者のホテル宿泊拒否事件が起きるなど、ハンセン病の元患者やその家族に対する差別・偏見は、今なお根強く残っています。

そのため、いまだに入所者の遺骨の引き取りを拒む家族が多いのが現状です。亡くなっても故郷のお墓に埋葬してもらえない入所者の遺骨が、この納骨堂に収められているのです。

収監者の名前の一部伏字（ふせじ）について

重監房資料館に展示されている収監者の名前は、一部伏字となっています。これは、収監者本人やその家族のプライバシーを保護することと重監房の歴史を正確に伝えることの２つの理念を尊重したものです。



（編集部で加工しました）

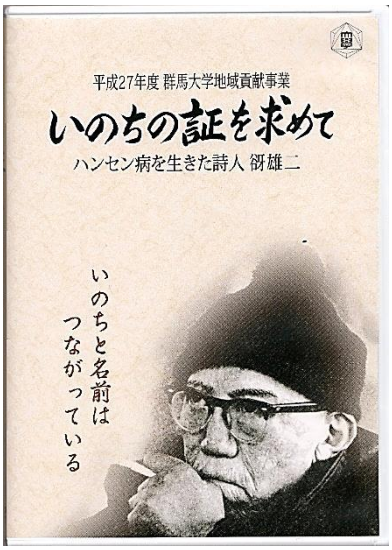
堕胎児の碑

療養所内の結婚、断種、堕胎

入所者に対する断種・堕胎は、1915（大正 4）年、東京の全生病院（現在の多摩全生園）で始まりました。入所者同士の結婚の条件として断種が行われましたが、実際には療養所内の妊娠はかなりの数に達したといわれています。しかし、ほとんどの療養所では、出産は認められていませんでした。そのため、入所者は、妊娠すると人工妊娠中絶などを受けざるを得ない状況に置かれていました。

厳しい差別と偏見の中で、入所者の家族を含め、外の世界にもハンセン病の患者、元患者の子どもを引き取って育てていく包容力はなかったのです。

映画『いのちの証を求めて』



映画は学生によるナレーションで始まります。

「みなさんはハンセン病という病気を知っていますか。ぼくはハンセン病について何も知りませんでした。今年の5月、大学のゼミでハンセン病問題のことを学びました。その時はじめて群馬県の草津町にハンセン病の療養所があること、その療養所栗生楽泉園に長年入所していた研雄二さんという元患者が昨年亡くなったことを知りました。」「ぼくは生前の研雄二さんを知りません。研さんという人がどんな人だったのか、何を考えどんな人生を送ったのか、研さんにとっていのちの証とは何だったのか、ぼくたちはそれを知りたくて草津へ向かいました。」

発病、多摩全生（ぜんしょう）園入園

研雄二さんは昭和7年（1932）年に東京の下町で長谷川家の第 10 子として生まれた。名前は良治。7 歳でハンセン病を発病し、母と兄とともに現在の多摩全生園に入所した。

兄の死、園名

当時、ハンセン病の療養所では家族に迷惑をかけないように園名を使うことを求められたが、愛情深かった父は良治たちにそれを許さなかった。しかし恋を諦め、無理を重ねた兄の死を機に、研雄二を名乗ることになった。研は兄の恋人の苗字から、雄は兄から、二は兄と恋人への贖罪の意味を込めて。

特効薬プロミンのおかげで

1949 年頃には研さんの病は回復に向かっていた。しかし研さんは鏡に映った自分の顔を見て愕然とした。病が治っても外見に刻まれた後遺症は隠しようもない。社会へ出て自立することは難しい。研さんは生きる意味を求めて書物を読み漁った。1951 年、19 歳の時、新たな覚悟で栗生楽泉園転園を決意する。

朝未来　研さんの恋

「手紙や電話だけではもはや尽くせなくなった一途な思いがある日あなたを雪ふかいこの尾根に踏み入れさせた」悲しい恋をうたった詩、朝未来（あさまだき）の朗読が始まると人間研雄二の鼓動が伝わってくる。

らい予防法違憲国家賠償請求訴訟

1996 年 3 月 27 日、研さんらが長い間待ち望んでいたらい予防法廃止が実現した。熊本と鹿児島のらい療養所入所者が起こしたらい予防法違憲国家賠償請求訴訟に対して 2001 年 5 月 11 日、熊本地裁は原告勝訴の判決を言い渡した。研さんらによる東京訴訟でも和解が成立した。

2014 年ハンセン病市民学会最終日に

「療養所で亡くなった人たちの名前を園名ではなく本名で刻もう。私たちは今まで名前まで奪われてきた。その名前こそがいのちの証なんだ。」こう言い残して 5 月 11 日、研雄二さんは栗生楽泉園で 82 年の生涯を閉じた。

礎に空白を！　姜信子さんの講演『いのちと名前』

研さんは生前、沖縄の『平和の礎』のように、全療養所の納骨堂の前にそこに眠る者たちの本名を刻んだ『人権の礎』を建立するよう提起して、未来に託しました。しかし差別と偏見にさらされた人たちの中にはそれを望まない人もいます。作家の姜信子さんは「研雄二詩文集『死ぬふりだけでやめとけや』」を編纂しましたが、そのなかの「私たちはここ楽泉園に『人権のふるさと』を築きつつある。なのに、その私たちが名前を隠してどうす

る？名前を出してこそ、生きててよかったと思える変革が成し遂げられるんじゃねえか」という研さんの言葉がそのことを示しています。講演で姜さんは、二つの思いに寄り添うような構想を語りました。ハワイモロカイ島のハンセン病療養所記念館やアウシュビッツ収容所での取り組みにならった「空白」の礎です。名前の列の中に空白が存在することでハンセン病問題の真実を想像してほしいと言うのです。今回のシンポジウムの大きな成果の一つと言えるのではないでしょうか。

作家　姜信子さん

栗生楽泉園から草津連山を望む（ガイドブックから転載）

「なぜハンセン病問題を？」西村ゼミ訪問

取材班はシンポジウムの一か月後、群馬大学荒牧キャンパスを訪問し、ゼミを主宰する西村淑子教授と、ゼミの学生さんお二人から１年間を振り返ってのお話しをうかがいました。

西村教授「あなたにしかにできないことに取組まなきゃ」と言われて

私は行政法が専門でもともと水俣・環境問題からかかわり始めましたが、何度も現地水俣に足を運んで「関心を持ってくれてありがたい」と感謝されても、「お客さん」でしかないという感じをぬぐえませんでした。そこで「あなたにしかにできないことに取組まなきゃ」と言われたことが転機になりました。

研雄二さんとの出会い

群馬大学に赴任してきたのは2000年です。ハンセン病についての知識は充分ではありませんでしたが翌 2001（平 13）年の「らい予防法」違憲判決を機に深く知るようになりました。2013 年 11 月に、憲法が専門の藤井准教授とともに草津の栗生楽泉園に行って研雄二さんに講演を依頼しました。その時、研さんは「私にはもう時間がない。若いみなさんにハンセン病問題を学んで語り継いでもらいたい」と訴えかけられました。

2014 市民学会に卒業生が参加

2014 年 5 月に開催された「市民学会」に学生ら 15 人が参加し、「共に生きる会」の方々の指導を受けてボランティアガイドをしました。その後、群馬大学地域貢献事業としてスタディーツアーに取り組みました。ボランティアガイドを実践しながら、より多くの人に知ってもらうにはどうすれば良いのかを考えました。そして 2015 年に、中高生向けのガイドブックとＣＤの制作に取り組むことにしました。

予算のほとんどが印刷費に

ガイドブックは 4000 部作製して、市民学会、九州や県内の図書館、人権擁護委員会、小中学校、県庁に配布しました。予算は学長裁量ですが、国立大学の財政は決して豊かではありません。

西村淑子教授は「行政法」「環境法」を担当

ＤＶＤは 1000 部作製。予算のほとんどは印刷費。交通費は自腹です。ブラックゼミと言われそう。学生に強制はできませんから、行きたい人、打ち込める人に期待しました。学生は予想以上に頑張ってくれました。

いくら勉強しても、知ることと語ることはまた別のこと。このガイドブックと DVD 制作を通じて、学生は体験学習をしましたね。

包括的事業連携協定とこれから

やっているうちに、大学も園も我々の取り組みを評価してくれるようになりました。今年 2 月に、大学、楽泉園、入所者自治会の間で包括的事業連携協定を結び、互いの理解を深めようということになりました。地域貢献事業は 3 年の期限付きで今年が最終年です。今後の取り組みについては検討中です。

みなさん、高齢化しています。現在入所者 87 人、平均年齢 86 歳です。10 年後には 30 人程度になるでしょう。これからどのように園を残すかを具体化する時期だと思います。

学生は学者と違って純粋で、入所者にも若い人に対する期待があります。勉強の中身を特化してアレンジしていく必要があります。

授業やフィールドワークに取り入れるには？

宮崎駿の映画で、「もののけ姫」や「千と千尋の神隠し」で取り上げられています。千と千尋では、主人公が自分の名前を取り上げられ、成長して名前を取り戻した。私はハンセンの問題を描いていると思いました。名前には重いものがあります。温泉も出てきますがハンセンの治療に関係することです。

富岡製糸場は光の遺産、ハンセンは負の遺産ですが、十分に人権教育の拠点になりうると思います。詩があり文学があり、厚みのある学習の場です。地域の素材を活用してほしいと思います。瀬戸内の三つの療養所を世界遺産にしようという取り組みもありますし。

姜講演の意義

私は姜信子さんの本にも影響を受けました。名前を名乗らないで生きることの不合理を伝えています。インスパイアされました。

2014 年、市民学会で徳田弁護士が「(名前を）残すことを強いるのは難しい」という意見を述べて、そこでこの「礎」の問題はストップした状態になっていました。姜さんは、先日のシンポジウムで、初めて彼女の意見を公にしました。

現場に飛び出す法学ゼミ

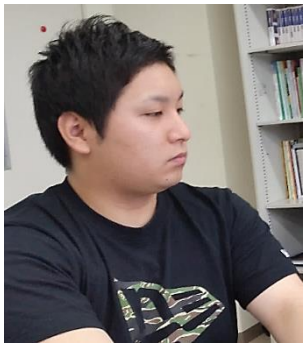
先日のシンポジウムには全部で 170 人が参加しました。大学、園、入所者が一つの場で一つの取り組みをしようと言えたことが大きな意味を持ちました。内容的にも、多様性があって、役所的なシンポジウムでなかったことに意義があります。

大学は学生が学ぶ場。学生が生き生きすること。それが実現できました。これがきっかけで倉渕中学校や母親大会に呼ばれています。

法律学は座学になりがちです。でも、現場に行くと社会の現実と人間の存在がひしひしと感じられ「エキサイティング」です。「現場に行こう、取り組まなければ」と考えたらハンセン病問題がありました。学生に行ってもらって体験してもらいながら学んでもらえます。社会と関わりながら、ハラハラすることもありましたが、大変なことを真剣に取り組んだので受け入れてもらい可能になりました。

ガイドブック作成に携わった大谷颯さんに聞く

西村ゼミで初めてハンセン病に関わる



法律が好きで西村ゼミに入ったのですが、ハンセン病についてはゼミに入ってから関わりを深めました。2015 年 3 年の夏まではディベートなど座学が中心でした。ガイドブック作成に関わったのは 7 月から今年の 3 月末までです。

学生の視点でガイドブックを制作

ガイドブックは 6 人の学生が担当しましたが、ページ毎に担当者を決めました。担当になった学生個人が自分の視点でまとめました。特にこれまでに触れられなかったことに着目しました。文中の黄色い部分が学生独自の視点でまとめられたところです。「残骨処理孔」や「命にこめられた思い」など。

草津通いはなるべくまとまって行きましたが、予定が合わないこともあったので回数はまちまち。あるスタッフは 15 回、僕は 10 回。土日は来ないでほしいと言われたので平日に予定をたて、アルバイトの都合をつけて出かけました。

お金も体もきつかったけれど問題の深さに気づいて続けられた

お金も体もきつかった。それでも続けられたのは、中途半端ではいけないと思ったからです。やる以上はやり遂げなければと思って取り組みました。やっているうちに問題の深さに気づいて、生半可な気持ちではいけないと思うようになりました。調べるうちに新しいことがどんどん出てきて、どこまで行けば真実にたどり着けるのかとも思いました。患者さんの話を聞いていても次々にいろいろな話が出てくる。患者の立場もあるし、園の立場もあるから、自分たちの思いだけで好き放題には書けないという気持ちになりました。

映画制作に携わった堤雅貴さんに聞く

映像（ＤＶＤ制作）を担当し、ナレーションもやりました。映像はたくさん撮ったけれど、編集時にどこをどう厳選するかが大変でした。研さんの恋のところを書くのに恋人にも会いました。とても貴重な体験でした。その時のことは言えませんが。

編集とカメラを回している時が楽しかった。物ができあがることは楽しいことです。これから何ができるかわかりませんが、ガイドブックとＤＶＤで少しでも世の中に発信できたと思います。群大の後輩に受け継いでいきたいです。

◇◇取材を終えて◇◇

◇◇朴　順子◇◇

私もたくさんある名前の中で、どれを名乗るかが自分のアイデンティティでした。名前の重みはずっと感じています。礎に名を残す問題でも、あとに残る人に迷惑をかけたくないという思いはよくわかります。残すことには是も非もあります。でも姜信子さんが語った「空白」には感ずるものがありました。大きなものを与えてくれた学生さんたちの取り組みに感謝します。

取材に参加して学生さんの真摯な姿勢に感銘を受けました。西村先生、学生さん、本当にありがとうございました。

《取材・執筆・撮影：瀧口典子、朴順子、長谷川裕介、倉林順一》